

研究ノート

ペッシェ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程 (1)

小 池 渺

I. はじめに

ペッシェ (Pescia) は、イタリアのフィレンツェの西方約 60 キロ・メートルに位置する人口 2 万余りの田舎町である。フィレンツェからそこへ行くには、サンタ・マリア・ノヴェッラ駅 (Firenze S. M. N.) 前の広場のターミナルでラッツィ (Lazzi) 社がその運行にあずかるバスに乗る方法もあるらしい。だが、私は同駅始発のヴィアレージョ (Viareggio) 行、またはルッカ (Lucca) 行の列車を利用することになっている。ロカーレ (鈍行) はもちろんディレット (準急) でもペッシェ駅に停車する。どちらの列車に乗るにせよ 1 時間前後の旅である。車内放送のサービスはないので、途中のモンテカティニ (Montecatini) 駅をあとにしたところからいよいよ窓外の風景に注意を払わなければならなくなる。はるか左前方に目をすえると、緑一色の平野が次第に広がりを増してくる。その中に銀色に輝く大きな工場の建物を認めることができたなら、やおら席を立て降車口のほうへ進みでる。列車は 2~3 分で私の降りる駅に到着するはずである。

ペッシェの町立図書館 (Biblioteca Comunale) は、その駅から歩いて 30 分ぐらいのところにある。小さな駅舎を背にして右の方向に 60~70 メートル歩を運ぶ。T 字路を左折して車道沿いに小高い山並みを前方に眺めながら直進する。やがて商店街を通り、築後 100 年は経っているものと思われる古くて高い集合住宅の合間をくぐり抜けると、ちょっとした広場にでる。石畳のその広場は、もう 1 つ別の広場に通じている。中世時代に建てられたというサント・ステファノー教会 (Chiesa di S. Stefano) の門前の広場である。目ざす図書館は、この広場を挟んで教会の向かい側にある。古めかしい建物の入り口には、「町立図書館／町立博物館／——カルロ・マニャーニ——」という標示板が掲げられている。それを左目で確認しながら中に入り、石造りの階段を、日本流に言えば 3 階まであがって正面の扉をあける。さらに左手に見える扉を開く。そこが図書館の受付、兼事務室、兼カー

ド検索室, 兼参考図書室, 兼休憩室なのである。十畳程度の広さであろうか。

「シスモンディ・コレクション (Raccolta Sismondi)」は、その部屋とは反対側の施錠された扉の奥に大事に保存されている。受付で挨拶をし、ごく簡単な手続きを済ませたあと、鍵束を手にした司書の導きにしたがって踵をめぐらす。部屋を出て、真向かいの扉の鍵をあけてもらう。いまにも崩れ落ちそうなトラック状の薄暗い渡り廊下を恐る恐る半周する。そこでもう1つの扉の鍵をあけてもらい、先と同じくらいの広さの部屋に入る。問題のコレクションはここにみられるのである。1個の白熱球によって照らされた細長いテーブルの両側には、網戸付きの大型の書棚が配置されている。その網戸の鍵を1つ1つあけてもらうと、内部を4段に仕切る棚のうえに全部で50個は優に超える部厚い書類ケースが並べられている。かたわらには、紐でくられただけの書類の束が積み重ねられている。ケースの中身は、こうした書類の束なのである。そのことを確かめたのち、網戸を閉めて部屋の奥のほうへ身を移す。正面の壁にはシスモンディの肖像画が掛けられている。右手にみえるカーテンの向こう側は、一段と暗くて狭い部屋である。この部屋もまた、「シスモンディ・コレクション」の保存のために使われているのである。

それらの部屋にみられるものは、やや具体的に列挙するなら、たとえばシスモンディ本人の手になる押し葉や水彩の写し絵やデッサン、調査記録、諸外国語の練習帳、抜き書きや要覧、コメントや注記、覚え書き、手紙の下書き、習作や試論、著書や雑誌論文などの下書き原稿、講義用原稿、作品目録、遺言状、彼あての手紙、彼のパスポートその他の遺品、彼の家族の筆になる手紙の下書きや覚え書きや草稿、家族あての手紙や公正証書、母親と妹の日記、母親の遺言状、フォールティ (Forti) 家・デスイデーリ家・ムニャーイ (Mugnai) 家・マルテッリーニ (Martellini) 家の人々の覚え書きと彼らを名宛人とする手紙や公正証書や学位証書、等々である。つまり、ペツシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」は、シスモンディ本人はもとよりフォールティ家に嫁いだ彼の妹までをも含むシスモンディ家の人々の書類という意味での「シスモンディ文書 (Archivio Sismondi)」ばかりでなく、「フォールティ文書」、「デスイデーリ文書」、「ムニャーイ文書」、それに「マルテッリーニ文書」をも構成要素としているのである。この中で「シスモンディ文書」がもっとも大きな割合を占めていることは、改めていうまでもない¹⁾。

1) これらの点について、さらに詳しくはつぎの文献にみられる同コレクションの目録を参照されたい。Aldo G. Ricci, *L'archivio Sismondi, Archivi e cultura, rassegna dell'Associazione Naz. Archivistica Italiana*, XIII, gennaio-dicembre 1979, pp. 108-140. ただしこの目録は、「シスモンディ・コレクション」を構成するすべてのアイテムを細大漏らさず書きとどめたものとはいいがたい。

その「シスモンディ・コレクション」、ないしは「シスモンディ文書」をわが国の人々に紹介したもとしては、いまは亡き吉田静一の2篇の論稿があるのみである²⁾。1970年代の前半に発表されたそれらの論稿は、当時のペッサの町や町立図書館の様子とともに「シスモンディ文書」の、わけても経済学関係の文書の概略を流麗な文章で紹介したもとして、今後も未長く人々の記憶にとどめられてしかるべきである。とはいえ、そこにおいてはただたんに提起ないし暗示されただけで吉田によってはついに解決されなかった問題があるのも事実である。たとえば、シスモンディの「遺産」はどのような経緯でいつごろペッサの図書館に収められることになったのか、という問題がそうである。したがって私は、まさにこの問題と正面からとり組み、ペッサ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程をその本源的なところから辿りなおすことによって、吉田の当該論稿の読者に追加的な情報を提供しようと考えた。こうして生みだされたのが本稿なのである³⁾。

その本稿は4つの節から成り立っている。「Ⅰ. はじめに」に続くⅡは、ペッサ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」に多かれ少なかれ関連のある5つの疑問の

-
- 2) 吉田静一「シスモンディ紀行(-)」、神奈川大学『商経論叢』第8巻第2号、1972年12月、73～85ページ；同「ペッサの『シスモンディ文書』について」、『経済学史学会年報』第11号、1973年11月、32～35ページ。このうちの前者の「随想」は、のちに補筆修正されたうえでつぎの文献に再録されることになった。同『異端の経済学者——シスモンディ』、新評論、1974年、17～44ページ。また、後者の「海外だより」のほうは、若干の修正と「追記」を加えられて、つぎの文献に再録された。同『フランス古典経済学研究——シモンド・ド・シスモンディの経済学』、有斐閣、1982年、229～234ページ。なお、吉田がいうところの「シスモンディ文書」の意味は、必ずしもはっきりとはしない。それは、シスモンディ本人の原稿・書簡類に局限されているようにもみえる。かりにそうだとしたなら、吉田のいわゆる「シスモンディ文書」は、イタリアの研究者たちが、そしてまた彼らにならって私がいうところのそれとは若干異なることになるであろう。
 - 3) 本稿は前稿と同様に、1991年9月21日開催の経済学史学会関西西部会第117回例会における私の報告「シスモンディの著作をめぐる——ペッサ町立図書館所蔵のシスモンディ・コレクションを中心に」（これの要旨は『経済学史学会年報』第30号、1992年11月、159～160ページに掲載されている）の一部分を敷衍したものである。この点については前稿の中のつぎの箇所をも参照されたい。小池渺「シスモンディの『遺産』の構成上の変化と行方——1932年まで」、『関西大学経済論集』第44巻第5号、1995年1月、157ページ注2。

呈示にあてられる。それらの疑問は、ⅢとⅣにおいて解決される。この2つの節では、主としてイタリアの研究者たちの業績に依拠しながら同コレクションの成立過程が詳しく辿られることになるであろう。

Ⅱ. ペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」に関連する疑問

その 1

ペッシャの町立図書館にシスモンディの原稿・書簡類が保存されているということを私がはじめて知ったのは、1972年に吉田静一が発表した「シスモンディ紀行(一)」と題する「随想」によってであった。それを読んだとき私は、この図書館を一度は訪れてみたいと思うと同時に、ジュネーヴに生まれ、そこを拠点として活動し、ジュネーヴ郊外のシェーナに没したシスモンディの文書類がなぜイタリアの田舎町ペッシャの図書館にみいだされるのであろうか、という疑問を抱かずにはいられなかった。

その疑問は、残念ながら吉田の続稿を読んでもいっかな解消されなかった。彼の諸論稿から私が読みとることのできた解説は、おおよそつぎのようなものであった。すなわち、シスモンディの原稿・書簡類がペッシャにみいだされるのは、シェーナに在任の彼がみずからの死を予感してそれらの文書類をペッシャに送ったからである。ほかならぬペッシャに送った理由は、そこが彼にとっての「第二の故郷」であったからである。ジュネーヴに生じた革命に追われてペッシャに亡命した若き日のシスモンディは、その地に「1794年の終りから1800年秋まで、6年間住んだ」。彼の母は、爾後も死ぬまで同地にとどまった。このためもあってシスモンディは、ジュネーヴに戻ったのちもしばしばペッシャを訪れた。彼はそこで仕事もした。彼のデビュー作『トスカーナ農業概観』と彼の名声を一挙に高めた『中世イタリアの諸共和国の歴史』の大部分は、その地で書かれたのである。シスモンディは、この「小さな町」を「こよなく愛した」らしい。「1842年の春」、病すでに重く、「トスカーナに帰ることも、そこに眠る父、母、妹のかたわらでともに眠ることも、もはや不可能であることを、彼は覚った。彼は、せめてもの思いをこめて、本、草稿、書簡の類を、ペッシャに送った」のである⁴⁾、と。

4) この一節はつぎの諸文献に述べられていることを、そっくりそのままの形での引用を交えながら私自身がまとめたものである。吉田「シスモンディ紀行(一)」、77～82ページ；同「シスモンディ紀行(三)」、神奈川大学『商経論叢』第9巻第3号、1973年11月、164ページ；同「ペッシャの『シスモンディ文書』について」、32～33ページ。な

だが、この解説は、シスモンディのことを根からのロマン主義者とみる一部の人々の偏見を助長する結果となりはしないだろうか。かりに死を覚悟したシスモンディがみずから本や草稿や書簡の類をペッシャに送ったのだとしても、それは本当に、数々の思い出が残る「第二の故郷」への郷愁にかられてのこと、ないしは、愛する両親と妹のかたわらに眠るという見果てぬ夢を追いつつ感傷の中に浸ってのことであつたのであろうか。このような疑念を私は払拭することができなかったのである。

しかも、百歩譲ってすべてが吉田のいうとおりであつたとしたなら、シスモンディは、彼自身の本や原稿や書簡類をペッシャの町 (Comune di Pescia) あてに、あるいは同地の教会その他の団体あてに送ってもよさそうなものであるのに、吉田ははっきりと、「彼がこれを送ったのは、彼の母が長く住んでいた家 [いわゆるヴァルキューサの屋敷] あてにである」⁵⁾と述べていた。これは一体どうしたことであらうか。当時 その家には、シスモンディにとってペッシャの「小さな町」などよりもいっそう「愛」すべき誰かが住んでいたというのであろうか。そうではなくして空き家であつたというのであれば、なぜ彼はその家あてに送つたのであろうか。

こうした問題を等閑に付したまま、吉田はさらにつぎのように続けるのであつた。「これらの原稿・書簡類は、いまこの家にはない。この町の図書館にそれらは移管され、保存されている。」⁶⁾「くわしい経緯はわからないが、大戦前後に二度にわたって町当局に買い上げられ [たようである] ……。買上げは、ごく最近 1967 年にも行なわれたらしい」⁷⁾、と。ここでは吉田が、彼自身をはじめとするシスモンディ研究者の担うべき課題を、みずから暗示していたのであろう。その課題とはすなわち、シスモンディの原稿・書簡類がヴァルキューサの屋敷からペッシャの町立図書館のほうに移管されることになった経緯をつまびらかにすること、とりわけ、それらの文書類は町当局による買上げと同時に町立図書館に移されたのか、それとも買上げ後しばらくの間はそのままヴァルキューサの屋敷にしまっておかれたのか、という点を明らかにすること、これであつたに違いない。私にはそ

お、これらはそれぞれ、つぎの諸文献に再録されている。同『異端の経済学者』、24～32ページ、136ページ；同『フランス古典経済学研究』、229ページ。

- 5) 吉田「ペッシャの『シスモンディ文書』について」、33ページ (または、同『フランス古典経済学研究』、229ページ)。同様の趣旨のことはつぎの文献にも記されている。同「シスモンディ紀行(-)」、81～82ページ (または、同『異端の経済学者』、32ページ)。
- 6) 吉田「シスモンディ紀行(-)」、82ページ (または、同『異端の経済学者』、33ページ)。
- 7) 吉田「ペッシャの『シスモンディ文書』について」、33ページ (または、同『フランス古典経済学研究』、229～230ページ)。

う思われたのである。

このためもあって、のちに1974年刊の吉田の著書『異端の経済学——シスモンディ』を読んだときには、私は勝手に、シスモンディの原稿・書簡類はペツシャの町当局によって買上げられたあともしばらくの間はヴァルキューサの屋敷に保存され、その屋敷を保育所に改造するかまたはとり壊してその跡地に保育所を建設する計画がもちあがった段階で、ようやく町立図書館のほうに移されることになったのであろうと思ひ込んでしまった。なぜなら同書にはつぎのような一節がみられたからである。「ある日の夕刻、私は彼女〔ペツシャ町立図書館の司書マダム・パオル (M^{me} Paol) からシスモンディの妹サラの子孫で四代目にあたるひととして紹介されたマドモアゼル・パラミデッスィ (M^{lle} Adriana Palamidessi)〕につれられてシスモンディの家に行った。この前〔1972年5月?〕に来たときは自由に出入りできたのに、今度〔1972年12月に〕行ってみると、工事中で門の中に入ることさえできなかつた。保育所になるのだという。そのことを語る彼女は、せまりくる夕闇のなかでもわかるほど、いかにも悲しげだつた⁸⁾、と。

ところが、吉田の同じ著書をガイドブックとしながら1988年4～5月に実際にペツシャを訪れてみると、そこには厳然とヴァルキューサの屋敷が実在していた。それは、G・マッテオッチィ (Matteotti) 広場の東端から西方にのびる緩やかな坂道「シスモンディ通り」をほぼのぼりつめたところにあつた。少なくとも外見上は、吉田の著書に掲載されている写真と比べて大きな違いは認められなかつた⁹⁾。物見遊山の折に私がその屋敷に立ち寄つたのは日曜日のことであつたが、普段はひとが、とりわけ幼児たちが出入りしているのではなからうかと思わせるようなものはなにひとつみあたらなかつた。そこから北西の方向に視線を投げると150メートルほど先に、保育所か小学校らしい建物がとらえられた。つまり、ヴァルキューサの屋敷は保育所に変えられたわけではなかつたのである。とすれば、振り出しに戻って、シスモンディの原稿・書簡類はなぜ町立図書館のほうに移されたのか、そもそもジュネーヴ人であつたシスモンディの文書類がなぜイタリアのこのような田舎町ペツシャの図書館にみいだされるのか、ということになる。これが、ペツシャ町立

8) 吉田『異端の経済学者』、42ページ。ただし、イタリア人名の日本語表記の仕方には若干の変更を加えた。また、〔 〕の中の注記は、それぞれ、同書の33ページと40～41ページ、17ページ、38ページを参照しながら私自身が施したものである。吉田のペツシャ訪問の時期にかんしてはつぎの文献をも参照した。「故吉田静一教授年譜並びに業績」、『東京経大会誌』第130号、1983年3月、13ページ。

9) Cf. 吉田、同上書、32ページ。

図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」に関連する私の最初の疑問であった。

そ の 2

2番目の疑問は、いま述べたばかりの私のはじめてのペッシャ訪問期間中に生じたものである。その町のホテルに投宿した私は、週日は図書館へでかけてシスモンディの手書きの原稿を解読し筆写するのを日課としていた。ある日、作業の合間に私は勇を鼓して先の疑問を司書に投げかけてみた。しかし、お互いの間には言葉の壁があって、それが主たる原因かどうかはいまだに不明であるが、とにかくも「知らない」との答えが返ってきた。図書館がひけたあとホテルに戻って主人相手に「シスモンディ・コレクション」の話をしようとしても、いっこうに乗ってくる気配が感じられなかった。こう述べると、上掲の吉田の著書や「随想」の読者の中には、そこに書かれていることとずいぶん様子が違うではないかと訝る向きもあるであろう。実際に違ったのである。

もちろん、すべての点で違ったというのではない。同じところもあった。それは、ペッシャの人々、なかんずく図書館の司書が「たいへん親切」¹⁰⁾で「いろいろ便宜をはかってくれ」¹¹⁾たことである。たとえば通りすがりの老婦人に銀行へ行く道を尋ねると、彼女はわざわざその銀行まで私を連れていってくれた。また、ある文具店の女性経営者の一人は、私をシスモンディ研究の資料の収集者と認めるや、店の奥のほうから1冊の本をとりだしてきて、イタリアでも商業ルートには乗らなかったが数年前に地元ペッシャで刊行された彼の書簡集としてこのようなものがあると教えてくれたりした¹²⁾。さらに、例のホテルの主人にいたっては毎日私が図書館から戻るたびに、少々大袈裟なのではなからうかと思われる態度で歓迎してくれるのであった。その図書館の司書たちも、私のために開館前にシスモンディ研究文献のコピーをとっておいてくれるとか、私がペッシャを離れる数日前からは頼みもしないのに閉館時刻を既定のそれより1時間ほど遅らせてくれるとか、さまざまな便宜をはかってくれた。

司書たちから私が受けたこの手厚いもてなしは、吉田の著作の読者にとっては、あるいは想像を絶するものであるかもしれない。なぜなら、そこにはつぎのようなことが書き記

10) 吉田、同上書、19ページ（または、同「シスモンディ紀行(-)」、74ページ）。

11) 同上書、34ページ（または、同上稿、83ページ）。

12) ここで言及しているのはつぎの文献のことである。J. C. L. Simonde de Sismondi, *Un viaggio d'altri tempi, 18 lettere-diario*, introduzione e commento di Margherita Chiostrì, Pescia, 1983, 129p.

されているからである。すなわち、「午前9時に開いた図書館は12時きっかりに閉館し、午後は4時から7時までしか開館しない。フルに利用したところで1日6時間である。12時から4時までの休み時間が私には何としても惜しかった。しかし遠来の客といえども例外は認められない。……この規則は情け容赦もなく適用されて、私は毎日12時には図書館を追い出された」¹³⁾、と。ちなみに、私が訪問した頃の正規の開館時間は、日曜日を除いて毎日9時から19時までの10時間であった。その間ビューブリオ (Publio) とローニ (Rogni) とジョヴァンニ (Giovanni) を含む5名の司書が、2～3名ずつ5時間交替で勤務していたのである¹⁴⁾。

だがしかし、それら5名の中には、吉田の著作に登場する「マダム・パオル」のようにシスモンディの妹の末孫を紹介してくれたり世界各国のシスモンディ研究者の消息やペツシャの図書館での彼らの精励ぶりやシスモンディ・シンポジウムに関する情報等を伝えてくれる司書は、残念ながらみいだすことができなかった¹⁵⁾。私が世話になった司書たちは、その「マダム・パオル」の名前さえも覚えてはいなかった。まして、吉田がみずから「名誉会員に推薦された」と述べている「シスモンディ協会」の名称などは、はじめて耳にするかのごとくであった¹⁶⁾。それらの名は、顔の広いホテルの主人の記憶にも残ってはいなかった。彼は、さすがにパラミデッツイの名前は知っていた。けれどもその素姓については、すでに断絶しているペツシャの名門デスイデーリ家の一員の血をひくひと、というところまでしか把握してはいなかった。彼の口からは、シスモンディの名も彼の妹の名もついに聞くことができなかったのである。

こうして吉田の著作に照らしてみると、図書館の司書をはじめとするペツシャの人々の間においてはシスモンディはずいぶん影の薄い存在になってしまっているように私には感じられた。逆にいえば、シスモンディにたいするペツシャの人々の関心は、私が訪れた1989年4～5月よりも吉田がみずから訪問したという1972年のほうが、格段に高かったら

13) 吉田、同上書、40ページ。ただし、漢数字はアラビア数字に書きかえた。

14) さらに付記しておくなら、1994年3～5月に再訪したときの開館時間は、月・火・木曜日は13～19時までの、また水・金・土曜日は8～14時までの6時間であり、館員は、ローニ、ジョヴァンニ、ジョヴァンナ (Giovanna) の3名であった。このうちのジョヴァンナは、若くて勤続年数が短いとはいえ、つぎに本文中にひきあいになす「マダム・パオル」を彷彿とさせる女性であった。

15) 「マダム・パオル」についてはつぎの文献を参照されたい。吉田、同上書、33～38ページ（または、同上稿、82～85ページ）、および40～41ページ。

16) 「シスモンディ協会」については、同上書の42ページを参照されたい。

しいのである。とすればそれはなぜなのか。確かに吉田も紹介しているとおりに、1970年の9月にはこの小さな田舎町でシスモンディにかんする国際シンポジウムが開かれていた¹⁷⁾から、それを機縁に町の人々の間にちょっとしたシスモンディ・ブームがまきおこったであろうことは像想に難くない。だが、果たしてそれだけのことであったのだろうか。これが私にとっての2番目の疑問であった。

その3

3番目の疑問は、いま言及した「シスモンディ国際シンポジウム」はそもそもなぜ1970年に開催されたのか、というものであった。開催時期が、かりに1973年であったとしたならば私は少しも怪しまなかったであろう。なぜならば、その年はシスモンディ生誕200年にあたっていたからである。そうした記念すべき年には研究者の間でなんらかのイベントが催されたりするものなのであって、実際1973年には、吉田の著書にもふれられているように、パリとジュネーヴにおいてシスモンディに関するシンポジウムが開かれていた¹⁸⁾。ところがペッシャでのシンポジウムの開催時期は、それより3年前の1970年であったのである。

この点は、シスモンディの生年ばかりでなく彼の生涯の節目となるようななどの時期を念頭においても説明がつかなかった。たとえば、彼がトスカーナに亡命しペッシャに身を落ちつけたのは1795年¹⁹⁾、亡命地ペッシャから本来的な意味での故郷に戻ったのは1800年、

17) Cf. 吉田, 同上書, 35~38ページ (または, 同上稿, 83~85ページ), 44ページの注; Carlo Cordié, *Un colloquio sismondiano, Il pensiero politico*, anno 4, n. 1, 1971, pp. [83]-89; *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi*, (Pescia, 8-10 settembre 1970), Roma, 1973, 308p.

18) Cf. 吉田, 同上書, 44ページの注; 同『フランス古典経済学研究』, 234ページ (または, 同「ペッシャの『シスモンディ文書』について」, 35ページ), および同ページの「追記」。

19) シスモンディのトスカーナへの亡命とペッシャへの到着の時期については、かねてより対立しあう2つの説があった。吉田や、彼が大幅に依拠したとみられるサリスなどは、1847年公表の「シスモンディ氏の作品の目録」にほのめかされていたことをものともしないかのごとくに、「1794年」説を主張して譲らなかった。しかし、ミネルビらは、ペッシャ町立図書館やフィレンツェ国立文書館 (Archivio di Stato di Firenze) の所蔵する文献を実際にひもといて、そこには問題の時期が「1795年」と明記されていることをつきとめると同時に、その記述と大枠において一致するポールグレイヴらの説のほうに一応は軍配をあげる結果となった。だが、より子細に検討してみるなら

『トスカーナ農業概観』と『中世イタリアの諸共和国の歴史』を刊行したのはそれぞれ1801年と1807～1818年、結婚したのは1819年、母親、妹、そして彼自身が死去したのはそれぞれ1821年、1834年、1842年のことであった。

したがって、私の当面の疑問を解く鍵は、シスモンディの生涯それ自体に関する事柄にはなくしてどこか別のところにあるのであろうと考えざるをえなかった。にわかには私の目は彼の「遺産」、なかんづくペツシャの町立図書館に保存されている手書きの原稿・書簡類のほうに向けられた。と同時に、すでに引用した吉田による紹介文の一節が私の脳裡に蘇ってきた。『シスモンディ文書』[の]……町当局に〔よる〕……買上げは、ごく最近1967年にも行われたらしい」という一節であった。ペツシャでのシンポジウムの開催時期が1970年であったのはほかでもなくこの文書類に関連するそうした事情によるのかもしれない。このように思いつつも、みずからの疑問をすっきり解消させる機会をもたぬまま私は、眼前の原稿の筆写をはじめとしてシスモンディ研究資料の収集の道にのめり込んでしまったのであった。

そ の 4

4番目の疑問は、ヨーロッパで渉猟して日本に郵送した資料を帰国後に整理する過程において生じたものである。それらの資料の中からペツシャの町立図書館か、またはヴァルキューサの屋敷に眠っていた手紙や原稿を活字におこして収録したと称する文献のみをとりだし、これを公表年の順に列挙してみると、つぎのようなリストができあがった。

ば、このポールグレイヴらの所説も全面的な勝利を収めたわけではないということが判明するであろう。詳しくはつぎの諸文献を参照されたい。吉田『異端の経済学者』、25～26ページ(または、「シスモンディ紀行(一)」、77～78ページ);同『フランス古典経済学研究』、229ページ(または、「ペツシャの『シスモンディ文書』について」、33ページ); Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932, pp. 28-30; List of M. de Sismondi's Works, in *Political Economy, and the Philosophy of Government: A Series of Essays Selected from the Works of M. de Sismondi*, London, 1847, p. [457] (repr. ed., *Political Economy and the Philosophy of Government: Selections from the Writings of J. C. L. Simonde de Sismondi*, New York, 1966, p. [457]); Marco Minerbi, Introduzione alla sua edizione di J. C. L. Sismondi, *Recherches sur les constitutions des peuples libres, texte inédit*, Genève, 1965, pp. 10, 13 e 66; [Sir Francis Palgrave, Life and Works of Sismondi,] *The Quarterly Review*, vol. 72, no. 144, 1843, p. 305.

1876. P. Villari, Une conversation de Napoléon I^{er} et de Sismondi, *Revue historique*, 1^{re} année, t. 1, janvier-mars, 1^{er} fasc., pp. 242-251.
- P. Villari, Sismondi, la storia dei Cento Giorni narrata dal Sismondi (epistolario inedito), *Nuova antologia, di scienze, lettere ed arti*, seconda serie, vol. 3, fasc. 12, dicembre, pp. [697]-704.
- 1877-1878. P. Villari, Lettres de Sismondi écrites pendant les Cent-Jours, *Revue historique*, 2^e année, t. 3, janvier-avril 1877, 1^{re} fasc., pp. 92-106, et 2^e fasc., pp. 319-345; t. 4, mai-août 1877, 1^{re} fasc., pp. 139-153, et 2^e fasc., pp. 347-361; t. 5, septembre-décembre 1877, 2^e fasc., pp. 347-360; 3^e année, t. 6, janvier-avril 1878, 1^{re} fasc., pp. 106-129.
1879. P. Villari, Notes de Sismondi sur l'Empire et les Cent-Jours, *Revue historique*, 4^e année, t. 9, janvier-avril, 2^e fasc., pp. 361-389.
1932. Teresa Lodi, Il Sismondi e la "Staël veneziana", *Civiltà moderna*, anno 4, n. 4-5-6, dicembre; l'estratto, Firenze, pp. 6-7, 11-12, 13-14, 16, 18, e 20.
- Giuseppe Calamari, La polemica sulla Rivoluzione del 1831 in due lettere inedite del generale Giuseppe Sercognani ad un amico dell'Italia Giovan Carlo Leonardo Simonde De Sismondi, *L'Archigimnasio*, anno 27, num. 5-6, settemb.-dicemb., pp. 341-344.
- Carlo Pellegrini, Lettere inedite di Benjamin Constant al Sismondi, *Pègaso*, anno 4, n. 12, dicembre, pp. 642-660.
1934. Carlo Pellegrini, Il gruppo di Coppet, Madame de Staël e i suoi amici secondo nuovi documenti, *Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa*, serie 2, vol. 3, fasc. 1; l'estratto, Bologna, pp. 46-76, e *passim*.
1935. G. C. L. Sismondi, *Epistolario raccolto*, con introduzione e note, a cura di Carlo Pellegrini, vol. 2, Firenze, gennaio, pp. 42-58, 60-75, 78-83, 86-113, 116-137, 141-175, 183-188, 190-208, 211-216, 219-224, e 226-295.
- Giuseppe Calamari, Due lettere di Napoleone Luigi Bonaparte al Sismondi, *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 22, fasc. 5, maggio, pp. 747-748.
- Giuseppe Calamari, Aggiunte alla "Corrispondenza" di Mazzini con Sis-

- mondi, *L'Archiginnasio*, anno 30, num. 4-6, luglio-dicembre, pp. 316-319.
1936. G. C. L. Sismondi, *Epistolario raccolto*, con introduzione e note, a cura di Carlo Pellegrini, vol. 3, Firenze, ottobre, pp. 165-166.
1938. Carlo Pellegrini, *Madame de Staël, il gruppo cosmopolita di Coppet, l'influenza delle sue idee critiche, con appendice di documenti*, Firenze, pp. [157]-221.
- Giuseppe Calamari, Lettere di Camillo e Filippo Ugoni al Sismondi, *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 25, fasc. 5, maggio, pp. 648-679.
- Giuseppe Calamari, Lettere di Santorre Santarosa al Sismondi, *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 25, fasc. 10, ottobre, pp. 1332-1336.
1940. Giuseppe Calamari, La mezzadria toscana in una lettera inedita del Capponi al Sismondi, *Bullettino storico pistoiese*, vol. 42, n. 1, gennaio-marzo, pp. 40-43.
- Giuseppe Calamari, Rapporti tra E. Mayer e G. C. L. Sismondi, *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 27, fasc. 11-12, novembre-dicembre, pp. 1025-1026.
1942. Giuseppe Calamari, Lettere di Ermenegildo Ortalli al Sismondi, *Rassegna storica del Risorgimento*, anno 29, fasc. 2, marzo-aprile, pp. 245-254.
- Pasquale Jannaccone, Una lettera di Malthus a Sismondi, *Rivista di storia economica*, anno 7, n. 3-4, settembre-dicembre, pp. 104-105.
1945. Pasquale Jannaccone, Sismondi fra gli economisti del suo e del nostro tempo, negli *Studi su G. C. L. Sismondi, raccolti per il primo centenario della sua morte (1942)*, Roma, pp. 201 n., 220, 221 n. 1, 223-232, 237, e 238 n.
1950. Giuseppe Calamari, L'amicizia di Celestino Chiti col Sismondi e i suoi riflessi sul Giusti, *Bullettino storico pistoiese*, vol. 52, n. 1-4, pp. 35-46.
1951. Carlo Pellegrini, *La contessa d'Albany e il salotto del Lungarno*, Napoli, pp. 279-366.
- Rolando Anzilotti, Due lettere inedite del Di Breme al Sismondi, *Ras-*

- segna lucchese*, n. 3; l'estratto, pp. [2]-[5].
1957. Carlo Pellegrini, Una lettera inedita del Quinet al Sismondi, *Studi francesi*, anno 1, n° 1, gennaio-aprile, pp. 69-70.
- Rolando Anzilotti, La fine della polemica Roscow-Sismondi, *Rassegna lucchese*, n. 18; l'estratto, pp. 7-10.
1960. Auda Prucher, Le «Lettres écrites d'Italie» di Frédéric Lullin de Chateauevieux, *Rivista di letterature moderne e comparate*, vol. 13, fasc. 3, settembre, pp. [197]-206.
1961. Auda Prucher, *Figure europee del primo '800 nel «diary» di Lady Charlotte Campbell Bury, con documenti inediti*, Firenze, appendice.
- Lucia Petrocchi Corradini, L'amicizia fra Carlo Sismondi e Isabella Teotochi-Albrizzi, da un carteggio degli anni 1803-1811, *Annuario 1955-1961 della scuola media "Leopoldo Galeotti"*; l'estratto, Pescia, pp. 9, 14-15, 17-18, 20-21, 25, e 28.
1965. J. C. L. Sismondi, *Recherches sur les constitutions des peuples libres, texte inédit*, edizione ed introduzione di Marco Minerbi, Genève, pp. [77]-375.
1967. Carlo Pellegrini, *Letteratura e storia nell'Ottocento francese e altri saggi*, Roma, pp. 240, 242-243, 246, 249, 250-252, e 253.
1968. Sven Stelling-Michaud, Sismondi, Fazy et Benjamin Constant, philhellènes, *Musées de Genève*, n. 83, mars, pp. 13-15.
- Rolando Anzilotti, Un matrimonio difficile, Jessie Allen in Italia e l'idillio col Sismondi, con quattro lettere inedite di Jessie Allen, nell'*Inghilterra e Toscana nell'Ottocento, Atti del Congresso di Bagni di Lucca per il cinquantenario del British Institute of Florence, 22-24 settembre 1967*, Firenze; l'estratto, pp. 19-32.
1969. J. C. L. Simonde, Les ressources de la Toscane, ou réflexions sur trois questions importantes d'économie politique, in Gabriele Turi, "Viva Maria", *la reazione alle riforme leopoldine (1790-1799)*, Firenze, pp. [318]-347.
1970. Gustavo Costa, I rapporti del Sismondi con Giovanni Fabbroni illustrati

- da un gruppo di lettere inedite, *Studi francesi*, n. 41, anno 14, fasc. 2, maggio-agosto, pp. 262-263 e 269.
1971. J.-C.-L. Sismondi, *Statistique du département du Léman*, publiée d'après le manuscrit original et présentée par H. O. Pappe, Genève, pp. [59]-201.
- Sven Stelling-Michaud, Sismondi et les historiens suisses (Jean de Muller, P. H. Mallet, Ch. Monnard, Alex. Daguët et J. C. Zellweger), *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, Jg. 21, Heft 3, pp. 287-288, 291-293, e 298-299.
1972. Sven Stelling-Michaud, Sismondi et Mickiewicz ou l'histoire d'une chaire manquée, *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, Jg. 22, Heft 1, pp. 108-109.
- Piero Roggi, Sette lettere di J. B. Say a J. C. L. Sismondi, *Rivista di politica economica*, anno 62, serie 3, fasc. 7, luglio, pp. 966-979.
1973. Sven Stelling-Michaud, Sismondi et les historiens de son temps, negli *Atti del colloquio internazionale sul Sismondi (Pescia, 8-10 settembre 1970)*, Roma, p. 33 et *passim*.
1977. Segundo Bru, Una carta inédita de John Barton a Sismondi, *Investigaciones económicas*, núm. 3, mayo-agosto, pp. 139-142.
1979. Norman King, Sismondi, Madame de Staël et *Delphine*, les débuts d'une intimité, *Cahiers staëliens*, nouvelle série, n° 26-27, pp. 70-76.
1980. Norman King et Jean-Daniel Candaux, La correspondance de Benjamin Constant et de Sismondi (1801-1830), *Revue européenne des sciences sociales*, t. 18, n° 50, pp. 88-99, 102-103, 123-124, 136-139, 142-150, 152-156, 157-158, e 163-168.
1981. Paul Waeber, Sismondi et les Simond de la Côte-Saint-André, *Revue du Vieux Genève*, n° 11, p. 50.
1982. Norman King et Jean-Daniel Candaux, La correspondance de Madame de Staël et de Sismondi, quelques lettres nouvelles, *Cahiers staëliens*, nouvelle série, n° 31-32, pp. 47-50.
1983. J. C. L. Simonde de Sismondi, *Un viaggio d'altri tempi, 18 lettere-diario*,

ペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程(1)(小池) 1177

Pescia, settembre, pp. 51-126²⁰⁾.

Leo Neppi Modona, Sismondi e la spedizione contro Algeri, *Annali della Facoltà di Scienze Politiche dell'Università di Cagliari*, vol. 8, p. 337 e *passim*.

1984. Norman King, Une collaboration libérale: Sismondi et Sir James Mackintosh, dans les *Mélanges à la mémoire de Franco Simone, France et Italie dans la culture européenne*, III: XIX^e et XX^e siècle, Genève, pp. 123-124, 132-133, 137, 139, 143-145, 146, et 147-148.

1988. Paul Waeber, Sismondi et *Le presbytère*, une convergence, *Bulletin de la Société d'Études Töpfferiennes*, n° 17, septembre, p. 2²¹⁾

ここに掲げられた諸文献の公表年に注目して気がついたのは、1876年よりも前、および1879年と1932年との間に、比較的大きなブランクがあるということであった。そのうちの前者のブランクにかんしては、あまり訝しくは思わなかった。なぜなら、シスモンディの「遺産」の中の手書きの文書類を掘りおこそうとする試みがようやく公然と展開されるようになったのは1853年以降のことであったからである²²⁾。しかもその頃には、彼の名は徐々に忘れ去られつつあった。そうした傾向に歯止めをかけることに寄与したばかりでなくシスモンディの経済学者としての名声を飛躍的に高めることにもなりさえたマルクス

20) この文献に収録された母親あてのシスモンディの手紙については、その現物の所在が明らかにされているわけではない。けれどもそれらは、ペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」とともにかつてはヴァルキューサの屋敷に保存されていたものであるとみてよいであろう。

21) 以上に掲げた諸文献の中で、シスモンディの手稿を公表したものは3点だけであり、あとはすべて彼の、または彼あての手紙を収録したものばかりである。本稿においては、それらの手紙の差出人や名宛人や日付などを明記する余裕はなかった。しかし、そうする必要性は痛感している。なぜなら私は、吉田の所説に若干尾ひれをつけて、「シスモンディ研究者がやらなければならない仕事」の1つとして「未発表の原稿」や手紙類を活字の形式において公表するということがある、と考えているのであるが、その「仕事」にとりかかるためには、問題の手紙や原稿類のうちのどれが未発表でどれが既発表なのかをあらかじめはっきりさせておかなければならないからである。なお、吉田の所説については、前掲書『フランス古典経済学研究』の234ページ、または前掲論稿「ペッシャの『シスモンディ文書』について」の35ページを参照されたい。

22) この点については前掲の拙稿を、その中でもとくに172ページを参照されたい。

の『資本論』が刊行されたのは、1867年のことでしかなかった。おまけに1875年までの23年間には、ヴァルキューサの屋敷とは別のところから同様の文書類を発掘するという作業のほうもわずかな成果をあげるのみにとどまっていたらしいのである²³⁾。

ところが、1879年と1932年との間のブランクについては事情が異なる。この期間中には、いま言及した作業のほうは少なくとも19点の成果を収めていた²⁴⁾。シスモンディのとりわけ経済学者としての名声は高まる一方であった²⁵⁾。にもかかわらずヴァルキューサの屋敷、またはペツシャ町立図書館に埋もれていた文書類を採録したと称する文献は、ただの1点も公にされてはいなかったようなのである。いや、そればかりではない。52年もの間において1932年にひとたびその種の文献の公表が再開されるや、今度は雨後のたけのこのようにつぎつぎとたくさん現われてきたのでもある。これは一体なぜなのであろうか。資料の整理に追われていた頃の私にはとうてい解決し難い疑問であった。

その 5

最後の疑問は、整理し終えた資料の中から1932年刊のサリスのシスモンディ伝をとりだして読んだときに生じたものである。この伝記を通読してみると、そこには、例の原稿や手紙類を参照した形跡がまったく認められなかった²⁶⁾。本格的なシスモンディ伝の作家であれば少しはひもといてしかるべきであろうと思われるそれらの文書類を、サリスはぜんぜんみていなかったらしいのである。とすればそれはなぜなのか。

サリスは、そのような文書類が存在するというを、とりわけヴァルキューサの屋敷

23) Cf. Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits, suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie*, Paris, 1932, pp. 44-60. これによれば、当該期間中にヴァルキューサの屋敷とは違ったところからシスモンディの手紙類を掘りおこして掲載した文献は、ただの4点だけであるということがわかるであろう。

24) この点については、さしあたりつぎの文献を参照されたい。 *Ibid.*, *loc. cit.*

25) 当該期間中には、シスモンディの経済学説をとりあげたものとして、たとえばつぎのような文献が公にされていた。[V. I. Lenin,] *К Характеристике Экономического Романтизма, Новое Слово*, n° 7 - n° 10, 1897; Albert Aftalion, *L'œuvre économique de Simonde de Sismondi*, Paris, 1899; Rosa Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapital*, Berlin, 1913; Henryk Grossman, *Simonde de Sismondi et ses théories économiques*, Varsaviae, 1924; Mao-Lan Tuan, *Simonde de Sismondi as an Economist*, New York, 1927.

26) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, 481p.

ペツシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程(1)(小池) 1179
に保存されていたということを知らなかったのではあろうか。断じて否である。彼は知っていた。なぜなら、この伝記と抱きあわせて刊行された同じサリスの手になるシスモンディ研究資料集には、「ヴァルクューサの屋敷(デスイデーリ家)」所蔵の文書類のリストが掲げられているからである。けれどもそのリストは、彼自身の調査に基づくものではなく、ヴィッラーリが作成したリストに依拠したものでしかなかった²⁷⁾。そこでこのヴィッラーリの作成にかかるリストのほうに目を向けてみると、そこにはつぎのような文書類が掲げられていた。

1. イタリアの諸共和国の歴史(不完全)。
2. フランス人の歴史。
3. 経済学。
4. 自由な諸人民の政体にかんする研究。
5. トスカーナ農業概観。
6. ジューリャ・セヴェラ, 歴史小説。
7. 『世界伝記集』[*Biographie universelle*]のための記事。
8. 外国文学講義,

この手稿には、1811～1812年のジュネーヴでのシスモンディによる講義〔のためのノート〕が含まれている。その講義を基礎にして、南欧文学についての彼の著書が成立したのであるが、同書の草稿は、ペツシャにはみいだすことができない。

9. レマン県の統計。
これは、同県の商業会議所のために作成された報告書である。シスモンディは1801年にその会議所の書記となっていたのである。
10. 手紙の下書き, および
ジュネーヴ憲法制定会議での演説集。
この演説集の中には、1842年3月30日の日付を有する生前最後のものがみいだされる。……〔それは〕会期明けにシスモンディによって執筆され、当時の新聞に公表されたものである。
11. さまざまな雑誌に発表された20篇の論文。

シスモンディによってとりあわせられたこれらの雑誌論文の全体が、彼によ

27) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents...*, p. 57. この文献にみられるリストは、前掲拙稿の175ページに訳出されている。

り、[雑誌から]切りとられたページで形づくられた1巻本の形式にまとめられている。彼はこれに索引をつけ、若干のどうでもよいような修正を施している。

12. ペツシャの植物学、ないしトスカーナはヴァルディニエーヴォレ (Valdinievole) 地方の植物の、1797年における開花時期の順に排列された押し葉のコレクション、ならびに水彩の写し絵。
13. 政治学、歴史、および文学選集(これは研究資料である)。
14. イングランド憲法の摘要。
これは、恐らく1793年と1794年にイングランドで同地の言語と憲法の勉強を同時に行なうために作成されたのであろうと思われる3巻構成の習作である。
15. ねたみ屋の粗忽者 [Le Distrait jaloux], 一幕の喜劇。
同上、ただし韻文による。
市長 [La Mairie], 7編の叙事詩。
この詩と喜劇は未発表である。とはいえ前者はみずみずしい習作である。後者は内輪での朗読のために書かれたものにすぎない。
16. 青春時代の詩。
17. 妹あての手紙、ならびに、
シスモンディあてのアルパニ伯爵夫人、スタール夫人、ウェリントン、ラファイエット、B・コンスタン、ギゾー、ミシュレ、ウーゴ・フォスコロ、ペツレグリーノ・ロッシ、その他の人々からの手紙。
18. フランス市民・フィレンツェのスコルガティーリ [Scorgatili]²⁸⁾学会の会員 S²⁸⁾・C・シモンドウ著、トスカーナの諸資源、または経済の3つの重要問題に关する考察。第1講——製造業の活力を回復させるための諸方策について。
1799年5月付の注記によれば、この労作は本来なら1799年4月に公にされるはずであったのだが、その公表は政治的な騒乱によって阻止されてしまった、ということである。
19. いろいろな言語でのさまざまな練習、それらの言語の面での、そして同時にいく

28) これらは、それぞれ、「農芸 (Georgofili)」, 「J」の解説ミスか誤記か、または誤植ではなからうかと思われる。

つかの学問分野での自己研鑽を行なうためのもの。

これには、植物学、農学、等々にかんするものがある。また、イタリア語の練習をするためにシスモンディが書き始めた双眼鏡 [la Lorgnette (Il Cannocchiale)] と題するユーモラスな新聞の数号の草稿が残っている。第1号においては彼は、イングランドの『見物人』[Spectator] 紙を手本にしたいと報じている。その言語はひどく不正確である。しかし彼は、当時のイタリア人たちのたるんだ生活態度を揶揄して才気煥発なところをみせている。²⁹⁾

ヴィッラーリ自身によって「これらの手稿のうちの幾つかは当該歴史家 [シスモンディ] の申し分のない伝記を書きたいと思う向きにはあるいは役に立つかもしれない³⁰⁾」との前置きがなされているこのリストを一覧して、サリスは、そこに採録されている文書類を、せめてその中の「幾つか」の「手稿」だけでもこれを見ておきたいとは思わなかったであろうか。かりに思わなかったとしたなら、それはなぜなのであろうか。新たな資料の繙読によってみずからのシスモンディ像の再検討が、したがって伝記の刊行の先送りが、余儀なくされることになるかもしれないと考えたからであろうか。また、かりにその資料をみてみたいと思ったとしたなら、なぜサリスはヴァルキューサの屋敷を訪ねなかったのであろうか。訪ねはしたけれども閲覧させてはもらえなかったということなのであろうか。私にはどうしても合点がゆかなかった。

そこで念のためにサリスのシスモンディ伝の「新版」を参照してみることにした。1973年にジュネーヴで発行されたこの版については、私はずっと、それは「1932年発行のパリ版」をそっくりそのまま「覆刻」したものにすぎないであろうと思い込んでいた³¹⁾。なぜなら表題紙には、覆刻版をだすことで有名な「スラトウカイン・リプリンツ (Slatkine Reprints)」の社名がみられたし、またその裏面には、いま引用したばかりの書誌事項が刷り込まれてもいたからである。おまけに、最後のページも「パリ版」のそれとまったく同じであった。ところが、献辞の入っている扉をめくってみると「新版への序文」という文字が目にとび込んできた。6ページに及ぶこの「序文」が、「1973年1月1日」に新た

29) P. Villari, Une conversation de Napoléon I^{er} et de Sismondi, *Revue historique*, 1^{re} année, t. 1, janvier-mars 1876, fasc. 1, pp. 241-242.

30) *Ibid.*, p. 241.

31) 本文への引用は、つぎの文献からのものである。Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842*, Genève, 1973, t. 1, verso de la page de titre.

につけ加えられていたのであった。そしてまさにその中に、サリス自身によるつぎのような述懐がみいだされえたのである。すなわち、「私がこの伝記を仕上げた頃には、それ〔ペッシャに存在するシスモンディの『遺産』〕はまだ研究者たちにとって利用しうる状態にはなかつたのである」³²⁾、と。

これによって、1932年より前のサリスをはじめとする研究者たちにとっては問題の文書類を利用したいと思ってもそれは所詮かなわぬ望みであつたのだということがわかつた。と同時に、前述した第4の疑問を解く鍵の1つもそのへんのところにあるのではなからうかと思えてきた。だがしかし、それでもなお、上掲のサリスの弁解には釈然としないものが残つた。彼がそのシスモンディ伝を「仕上げた頃」には「ヴァルキューサの屋敷(デスイデーリ家)」所蔵の文書類はまだ「利用しうる状態にはなかつた」のだとすればそれは一体なぜだつたのか、という肝心の点が語られていないからである。そしてこの点こそが、私の最後の疑問であつたのである。

以上においては、ペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」に多かれ少なかれ関連する私の疑問を、それを抱くに至つた経緯などにも言及しながらやや詳しく紹介してきた。それらの疑問は、いまでは主としてイタリアの研究者たちの諸業績のおかげですっかり解決されている。そこでつぎに、彼らの調査研究に依拠しながらペッシャ町立図書館所蔵の「シスモンディ・コレクション」の成立過程をその本源的なところから辿りなおし、そうする中で、私の疑問がいかに解決されたかを明らかにしてゆくことにしたい。

32) *Ibid.*, p. 3.